

なりわいとしての「小商い」
—市と行商にみる地域的流通の意義と可能性—

提出者 山本志乃

〔論文の内容の要旨〕

民俗学における生業研究は、主要な生産活動を指標とした文化類型の検討や生産技術の分析を中心に展開してきたが、近年では、それらの成果に基づき、生産活動を含む生計（生命）を維持する活動としての日常生活の成りたちを、総体的に明らかにしていく方向へと転換してきている。

本論文は、従来の生業研究で等閑視されてきた、市や行商に代表される「小商い」という個人間での小規模交易を対象に、それを生き方として選択した人びとの多様な生活実態を描き出すことをとおして、市と行商の生産活動としての位置づけを捉えなおし、生計維持活動としての適応性と普遍性を明らかにしようとしたものである。

本論文は、序章と終章とを含めて8つの章から成っており、そのうち6つの章については、日本民俗学に関する学会誌等に掲載された査読付き既発表論文をもとにしている。構成は以下のとおりである。

序章 研究の目的と意義

- 1 節 研究の目的
- 2 節 先行研究にみる市と行商へのまなざし
- 3 節 研究の方法と論文の構成

I 章 市稼ぎへの選択

- 1 節 千葉県・大多喜の朝市と農家出店者
- 2 節 市稼ぎ開始当初の生計活動とその変遷
- 3 節 商品の変遷と販売戦略
- 4 節 なりわいとしての市稼ぎ

II 章 フリウリという生き方

- 1 節 新潟県上越市における市と行商
- 2 節 フリウリを継ぐ
- 3 節 なりわいと生きがい

III 章 漁民から商人へ

- 1 節 鉄道と魚行商
- 2 節 行商組織と専用電車の運行

3 節	松阪・獵師町周辺の行商人
4 節	消費地大阪における魚食文化と行商の位置づけ
5 節	「伊勢屋」が運んだ魚食文化の大衆化
IV 章	鉄道利用による行商の地域間ネットワーク
1 節	山陰線の開通と行商
2 節	鳥取昭和商業協同組合の活動
3 節	湯梨浜町泊における戦後の魚行商
4 節	アキンドがとりなす地域間ネットワーク
V 章	市をめぐる共存の原理
1 節	高知・街路市の変遷と現状
2 節	街路市のサカキ・シキビ店
3 節	街路市にみる変化への適応と地域資源としての可能性
VI 章	「小商い」のダイナミズムと普遍性
1 節	大根島の生業と生活
2 節	行商の変遷
3 節	地域産業としての行商―由志園の場合―
4 節	時代への適応と行商の展開
終章	本論のまとめと今後の課題
1 節	本論のまとめ
2 節	今後の課題

以下、章ごとに内容を略述する。

序章においては、提出者の修士論文に端を発する本論文の問題意識を説き起こすとともに、生業研究における個人を単位とした、生きるという視点から記述する民俗誌的分析の意義と、生業研究を基礎においた民俗文化の包括的分析の可能性について論じている。

次いで、I 章から VI 章では、提出者が 20 余年にわたって実施してきた聞き書きや参与観察等を基にした事例分析例の記述がなされている。

I 章と II 章では農家における「小商い」の事例をとりあげている。農家による「小商い」は、自家生産物の一部を商品とするところに特徴があるため、生計維持活動における位置づけも、他の生業との並立を基本とする。ここでは「小商い」の選択事由とともに、自家生産物の商品化過程を分析し、社会変化への対応の具体像を捉えようとしている。

I 章では、千葉県夷隅郡大多喜町で開催される六斎市に 40 年間出店を続けた女性への参与観察と彼女が記した日記をもとに、高度経済成長期における産業構造の変化を背景とした「市稼ぎ」への選択が、当時の農家における一つの生活戦略であったことを指摘している。

Ⅱ章では、同じく農家における生活戦略の一つとして、新潟県上越市で現在も野菜行商（フリウリ）を続けている女性を取り上げている。結婚後、姑から仕事を継承し、やがて独自に販路を開拓して、需要の変化に合わせて品ぞろえを工夫する過程を、当事者のライフヒストリーから復元し、フリウリという生き方への選択と、それを生活戦略として継承してきた過程を示している。

Ⅲ章とⅣ章では、鉄道を利用した行商、なかでも漁村地域からの魚行商による「小商い」を題材としている。自家農作物やその加工品を商品とする農家と異なり、漁村においては、各家の漁獲物は一旦集荷され、行商人はそこから仕入れて商品とする。そのため、生計維持活動における「小商い」の位置づけも農家に比べて、より専門化したものとなることに注目している。

Ⅲ章では三重県伊勢志摩地方から大阪に向けた魚行商をとりあげ、漁民が大都市に進出する商人へと活動を展開させていく過程を、消費生活が進展していく時代背景や大阪における魚食文化の発展と対比させて論じている。

Ⅳ章では、鉄道を利用した行商がとくに盛んだった山陰線沿線のうち、鳥取県東部・中部地域を例として行商の組織化の実態や、女性による魚行商の具体像をとおしてみた地域間の交流や、購入者との関係性の構築過程について述べている。

Ⅴ章では、農漁村などの生産地とつながりを持たない、販売に特化した販売者の事例として、高知県高知市の街路市において、二世代・約 60 年にわたってサカキ（榊）とシキビ（シキミ・櫛）のみの販売を続けてきた男性を例に、高度経済成長期を背景とした生産物の新たな資源化の展開と、山村の生産者（山主）と伐採専門の技術者（キリコ）との技術の連携という、「小商い」の背後に存在する地域内での共存の原理を指摘している。

Ⅵ章では、交易という行為そのものを資源とする地域のあり方と、地域における時代に即した「小商い」の展開に注目している。島根・鳥取県境に位置する中海に浮かぶ大根島の人びとは、商品作物の栽培や中海の漁獲物による交易によって生活を成り立たせてきたが、第二次世界大戦後の社会変化や自然環境の変化に直面するなかで、牡丹苗を中心とする花卉栽培が新しい産業になると、島の女性たちがこれを全国各地に売り歩くという他に類例を見ない大規模な行商形態にまで発展させた。その展開の実態と、当該行商が衰退した後も、新たな形での再現・再生が図られていることを示すことで、「小商い」に関わる人びとの生きる力と、地域的流通という生産活動に内包された普遍性、現代社会への適応の可能性を論じている。

終章では、Ⅰ章からⅥ章における「小商い」の事例分析の総括に加えて、宮城県気仙沼市の朝市が東日本大震災後に担ってきた役割を検証することで、「小商い」という地域的流通が果たしてきた意義と可能性について考察している。「小商い」という交易方法が有する、商品に付随する価値だけでなく、その生産や販売に関わる人たちの生きかたにまで目を向けさせるような他者との関係性のあり方が、急速に世代交代がすすむ日本社会における新たな人間関係の構築を探るうえでの一つの指標になることを主張している。

〔論文審査の結果の要旨〕

本論文は、「小商い」の実態を明らかにすることで、地域内流通という生産活動が生計維持活動として果たしてきた意義を、適応性と普遍性という視点から論じたものである。

本論文において評価すべき主要な点は、次の三点である。

第一点は、研究目的に関する点である。市や行商に従事する人々による取引の実態的な分析を行う試みは、流動的で移動性の高い被調査者との信頼関係の構築なしには調査自体が困難で、一定の成果をあげるまでに多くの時間を要するため、その研究の必要性は研究者の間で理解されていたが、現実に取り組む研究者はほぼ皆無であった。

さらに、提出者の視座は、販売者側と購入者側との間で形成されている関係性を明らかにするだけにとどまらず、地域内流通という範囲を超えて、現代社会における新たな関係性の形成に関する模索にまで及んでおり、生業研究としての成果を超えて、現代社会が直面している課題にまで言及している点も高く評価できる。

第二点は、研究方法に関する点である。I章から終章までの各事例分析は、精緻なフィールドワークをもとにした、被調査者との信頼関係を構築することで為し得た成果である。記述後に被調査者やその家族に記載事項を確認してもらうなど、主観的な分析になりがちな参与観察の手法の限界にも留意し、データの客観性を担保する作業を加えている点も、フィールドワークにおける科学的データ処理の手法として評価すべき点である。

第三点は、考察内容に関する点である。本論文の目的とした、市と行商の生業としての位置づけを捉えなおし、そこに内在する適応性と普遍性を明らかにすることについて、本論文では、昭和ヒトケタ世代の販売者と購入者との間で形成されている、個人間の交易を介して他者の生き方に共感していくという、他者理解の関係を抽出している。

このことは、「小商い」の構造としては、生業戦略として理解されていくことになるが、他者との新たな関係性の構築という視点にたてば、気仙沼市における朝市の事例は、東日本大震災という共通の経験を背負った販売者と購入者との間での新たな関係性の構築事例となっており、提出者の終章における他者との関係を構築する視座に関する主張を、一層明確なものにしている。狭義の生業研究を超えた、日常生活を総体的に捉えた分析として高く評価できる考察内容である。

いくつかの課題についても言及しておきたい。

第一点は、報告者が論文中でも指摘していることであるが、生業研究の成果としては、定性データを主体とした分析になっており、具体的な収支などに関する定量的なデータによる裏付けが十分でないことが惜しまれる。個人情報としての収支に関するデータについては、仮に入手できたとしても公表が憚られる場合があることなどは十分に理解できることであり、報告者が20年余りにわたって収集してきたこれらの調査データの蓄積の意味を被調査者に理解してもらえらる時期を待てば、さらに実証的な分析が可能になるのではないかと考える。

併せて、「小商い」における購入者に関する裏付け調査や「小商い」を支える家族の役割

などにも、継続的な分析を加えていけば、傍証的なデータの集積もさらに可能であろう。

第二点は、市や行商に代表される「小商い」を対象に、そこに内在する「適応性」と「普遍性」を明らかにしようとした報告者の意図と、前者を論じた「資源としての『小商い』」と後者を論じた「身体感覚を基盤とする取引」という考察内容との関係がやや曖昧であるため、さらに論理の整合性を高める努力が必要である。

これらの課題が残されてはいるが、本論文は「小商い」と呼ばれる生業が果たしてきた社会経済的な役割を明らかにしたことに加えて、現代社会において希薄化しつつある人と人との関係性を再構築していく有効な視座を示した点で、高く評価されるものである。

また、女性が担ってきた労働の役割について、「はたらくこと」と「かせぐこと」という視点から分析していく意義を示したことも、この論文の評価をより高めている。